オスカー・シュレンマーの「壁画」概念

京都市立芸術大学 青木 加苗
AOKI Kanae

オスカー・シュレンマー（1888～1943）は、2つの側面で知られている。一つはバウハウスの舞台工房で活動した人物として、もう一つはノイエ・ザッハリッヒカイトの作家としてである。以前は後者、つまり1930年代の絵画が評価されてきたが、近年は専ら舞台作品への注目度が高い。確かに、バウハウス時代に完成した《トリアディック・バレエ》という舞台作品が彼の代表作であることは間違いなく、また「バウハウス舞台」として活動した際に生まれた諸作品は、バウハウスについて論じる際に見逃されてはならないものではあるが、シュレンマーが1921年にバウハウスへ招聘されたのは、舞台工房ではなく壁画工房を任されるためであった。このことは、この段階における彼の評価が舞台作品ではなく、絵画に対してのそれであったことの裏付けであろう。しかしこれまで日本におけるシュレンマーの絵画作品は、前述したようにごく限られた時期のものが紹介されるにとどまり、全体的なシュレンマー像を明らかにするには至っていないと思われる。よって本発表ではバウハウス初期までの絵画に焦点をあて、シュレンマーがどのようにして独自の造形言語を獲得していったのかを検証したい。

レアルシューレ在学中から芸術家を志していたシュレンマーは、1906年にシュトゥットガルトの造形芸術アカデミーで本格的に絵画の鍛錬を始めるが、ここでの教育はアカデミーという名にふさわしい古典的なものであった。しかし彼はそういった基礎的訓練に飽き足らず、自らすすんで同時代の絵画の動きをなぞっていく。その中でも同じ対象物を繰り返し描くことによって発見された、基本形態への還元という方法は、シュレンマーに画面の平面化を促した。それに加えて、対象物から抽出された形態を特徴的づける線は、画面を構成する要素として大きな役割を与えられることとなる。こういった探求を通してシュレンマーは、画面を線によって分割するという段階に到達する。画面構成という点に関して言えば、これは一つの完成形であった。しかしシュレンマーは、更に新たな問題を展開するのである。というのも、彼は自分の作品を展示する際に意識的な配置を行っているが、これは絵画面とそれが展示される室内空間とがいかに関係を持ちうるのかというテーマの現れであった。それは言い換えると、画面構成の問題から脱した、絵画面の拡張という意識である。その際に用いられた要素が絵画における線であり、壁面さらには室内空間の構造線との関連づけを試みたのである。

以上のように、これまであまり取り上げられてこなかった初期の絵画作品には、シュレンマーの造形理念を理解する手がかりがあると考えられる。発表希望者は、シュレンマーによる初期作品の位置づけを探るために、本発表において考察を深めてみたい。